2014年２月18日　福島原発告訴団
～出版記念メディア懇談会より～

福島からの発言　1

渡辺ミヨ子さん

（田村市都路町から、同市船引町の借り上げ住宅に避難）

私は地域の中で「反原発」の声を一所懸命に上げているんですけれども、田村市の都路から避難して今、船引町の借り上げ住宅に孫と夫と三人で住んでます。

私は、以前は大人しくてあまり喋らない人間だったんですけれども、子どもが中学生の頃に子どものいじめ問題があったのがきっかけで、喋らなければ子どもが救われないっていう気持で、自分で感じたこと、不安なこと、何でも真実を話そうっていう気持で話して参りました。しかし、地域の人からは、そんな突拍子もなく本当のことをはっきり言う奴はいねえんだ、っていうふうによく非難されることが多かったんですけれども、こういう場所に原発事故以来出てきて、私の話が聴いていただけることが本当にありがたいし、また私の意見以上に、私が感じるようなことを発表してくださる方が大勢いらっしゃっているので、本当に元気を頂いております。有難うございます。

私は、都路に隣村から嫁いで来ました。地図で見ていただければよく分りますが、合併して田村市となった旧都路村は、双葉郡のほうに突き出ていて、川も全部、双葉郡に流れていきます。そういう地域なものですから、田村市は20キロ圏と30キロ圏一緒に、(2011年3月）12日の夜、避難指示が出ました。それで、学校も田村市の西側にある別の町の空き校舎で（2011年）4月6日から何事もなかったように始められ、避難していたのに、と驚きました。それから4ヵ月後には、30キロ圏内の避難が解除されたのです。20キロ圏の128世帯だけが残され、分断されてしまいました。30キロ圏の40%の人たちは帰りましたが、残った60%の人たちは帰っても安心して暮せないという人たちで、生活弱者です。帰ればなお、弱者になります。補償も一年半で打ち切りなので、もう、帰らざるをえない人が多くなっています。帰って風呂を焚くために汚染された焚き木を山から集めている人もいます。都路の直売所は、国道沿いに2カ所ありましたが、年金生活者にはとても喜ばれていました。自分で作った野菜や漬物、山菜、茸など、皆それぞれに工夫を凝らして出すのが生き甲斐だったのです。都会の人たちもわざわざ都路に買いに来てくださり、都路の人と都会の人の交流の場でもありました。しかしもう都路であの光景は取り戻すことはできなくなってしまいました。

小中学校もこの(2014年)4月から元の場所に帰ります。80%の子どもたちが、元の学校で学ぶことになりました。避難している地域から､バスで40分もかけて通う子どもたちもいます。帰る子どもたちの70%くらいは、避難している場所から、スクールバスを出すからっていうことで、地元の学校へ帰るわけです。学校の近くには除染で出た放射性のゴミの袋が山のように積み上げられています。長野県や沖縄県の人たち、その他の地域の心ある人たちから山村留学や疎開・保養などのお誘いがありますが、自分だけが行くのを悪いことと思うのか、「友だちが行かないから」と県内に留まってしまうのです。県内には避難した都路や川内より放射線量が高いところがたくさんありますが、そこへ双葉の人たちがたくさん避難して生活しているのです。

除染で出た放射能汚染物など、たくさん県内各地で燃やされています。また、住民の帰還が進められている都路では、県内各地から集められた放射能汚染物を一日400トン焼却する施設が今、造られようとして計画が進められています。住民が反対をしていますが環境省はそれには耳を貸さず、強力に進められていく危険を感じています。

県内に住む子どもたちが今後どうなっていくのか、とてもとても心配しています。終戦後の私の住んでいる地域は山間部の零細農家が主でした。どの家にも5、6人以上の子どもがいましたが、食糧難の時代で、農家が米を作っても供出米の割り当てがあり、自分の家で米を食べないで出さなければならなかったのです。それでも芋に栗とか､山のアケビ､葡萄など何でも、木登りをして、子どもたちは食べていました。大きい子が小さい子に取ってやり、皆、スクスク元気に育ったのです。やがてその子どもたちが育ち、中学校を卒業して、関東地方に「金の卵」ともて囃されて集団就職していきました。就職列車に風呂敷包み一つ持ち、就職していったんです。そして戦争放棄と自由民主主義の憲法に守られて日本の復興と経済成長の大きな力になっていったと思います。

今の子どもたちはどうなるのでしょう。米は余り、農家も農地も荒らし、現金収入を求めて生活は豊かになり、子どもたちも有り余る食糧の中で生きています。自然を駈け回っていた子どもたちは、原子力発電所が作られた頃からだんだんと変ってきました。都路でもたくさんの人が原発で働くようになり、生活はどんどん豊かになりました。その一方で子どもたちの様子が変っていきました。都会の学校と同じように、いじめや登校拒否の子どもも出てきて、うつや引きこもりなどもあり、子どもが詐欺まがいの行動を取ったりで、親も先生もとっても精神的に深刻でした。そしてあちこちで「青少年健全育成」の看板が目立つようになったのです。あれから何十年過ぎるのでしょう。いじめや登校拒否、そしてうつ病、引きこもり等、私たちの地域は少しは良くなってますが、全国的にはまだまだ減っていないようです。

今、日本では世界でもっとも高齢化が進んでいると思います。福島の原発事故ではっきりと分ったはずです。いかに子どもたちを放射能から守る術がないのか、その方法を知らないのかが、この超合理化社会の中で一番、守らなければいけないはずの子どもたちを守らずに、経済を強くしようとすることだけ考えて、また命を危険に曝す原発を動かす、行き先がいったい見えていないのでしょうか？仕事のない国民が皆で荒地を耕し、食糧のない人たちにも食べてもらえば、どんなに喜ばれるでしょうか。

同じ地球に生きる人間同士、豊富な食べ物があるからと田畑を放棄して原発を動かしている日本人を誰が喜んで見ているのでしょう。これ以上、放射能や化学物質で大地や海を汚すのは大切な子どもたちが数少ない日本の未来を奪うことになります。こんなことは日本人は誰一人として喜んではいけないと思います。

東京電力と日本政府にはしっかりと反省し、責任を取って、こんな状態を一日も早く改善して欲しいと思います。

あと私は、今がこの時と思って発言させていただいてますが、このように発言をしなければいけないと真底思ったのが、子どものいじめ問題が深刻な時に、田村の教育懇談会と言いますか、青少年健全育成村民会議というものがあったのです。その時に旧田村郡で一番の教育の頂点に立っているという方が武藤さんとおっしゃる、武藤類子さんのお父さんだったようなのですけれど、その先生の講演を聴いた後に私は、「先生のお話は貧しい時代のお話で、今は豊かで子どもも食べ物が有り余っている時代ですから、そこはちょっと違うんじゃないんですか？」みたいな質問をしたものですから、村の人たちに「田村の一番偉い教育者にお前は何を言うんだ、何ということを言うんだ」って、とっても責められました。それでもまた私が先生に、「私の知っている人で出稼ぎに行っていた人が、帰ってくる途中で郡山で交通事故にあって、郡山の大きな病院に運び込まれたそうです。その時にその人はもう、頭を打ち瀕死の重症だったものですから、その大きな病院の院長先生に『この人はもう駄目だからこのまま連れて帰って下さい』と言われたそうです。そしたらその時、『先生！』ってそこにいたそのお母さんが言ったそうなんですね。『どうして駄目なんだ。この息子の頭を剥いで見せてください！』ってその先生に。それでその先生もお母さんの言葉をうけて、息子の頭を開いて、ちゃんと手術をして、今はピンピンして生きています。そういうことがありましたから、どんなに偉い先生が相手でも、母親は子どもの一大事には、先生に聴いていただくべきことは聴いていただきたいんです」って言ったんです。その時に武藤先生が、私に向って「その通りです！」って言ってくれました。「でも、今、そういうお母さんが本当に少なくなりましたね」って優しく言ってくださったことが、忘れられません。今でもその先生の眼差しは忘れることができません。

今、福島県の母親はすべてその気持でいっぱいじゃないかと思うんですね。言う人も言わない人もいますけど、心は一つではないかと思います。でも、今言わずに、子どもを守るために大きな声で叫ぶのが私たち母…もう私は母ではないですけど、母の役目ではないかと考えています。本当に有難うございました。

>>

福島からの発言　2

片岡輝美さん　会津若松市

皆さん今晩は。片岡輝美と申します。東京電力福島第一原子力発電所事故から3年が経ちました。私が最近色々思うことの一つに、本当にこの3年間は辻褄が合わない日々だったということです。幾つかの県内ニュースや情報を皆さんにお伝えして、その辻褄の合わなさを知っていただきたいと思います。

今年1月19日の県内ニュースです。この日、東電は3号機から非常に高い汚染水が見つかったと報道しました。もちろんこの後も次々と高い線量の汚染水が見つかっていますが、この時点では3号機の検出されたものとしては一番高いものでありました。そして東電は続けて、汚染水は外部に出ていないが、出ているその場所の特定を進めると言っておりました。調べてみれば、原子炉から護岸まではおよそ40mぐらい。1日に1機についておよそ100トンの水が注入されている。それが40mを流れていかない、それが外部に出ていないと言われたとしても、私たちは「そんなことはないだろう、おそらく外部に出ているだろう」と素人でも考えます。このように東電から非常に危機的な発表がありました。これがその日のトップニュースです。

ところが、次のニュースは、福島県が東京オリンピックの関連事業を検討しているというものです。福島県知事佐藤雄平さんは、「全世界に福島の姿を発信できることになる、しっかりと対応したい」という声明を出しました。そして2020年のオリンピックに向けて32の関連事業が検討されていると言っています。例えば「聖火リレーの実施」「アスリートたちの事前合宿」または海外の選手たちを招くという内容です。復興を加速化して、世界に福島の現状を知ってもらう機会だと言っています。さらに、Jヴィレッジは原発作業員の宿舎となっているプレハブがあるわけですが、それは2018年を目処に本来のサッカースタジアムに戻し、事前合宿ができるようにすると言っています。しかしJヴィレッジから福島原発までは約20㎞。本当に辻褄の合わない話です。片や危険な状況の中、緊急対応が日々刻々と求められているところがあり、もう片方ではそのようにオリンピックの華やかさを利用して福島県が復興しようとしている。それを私たちはニュースで見ているのです。

さらに、随分前からある報道です。「子どもが戻らなければ復興はできない」と双葉郡に中高一貫校を新設が進められています。つまり「この地域に子どもたちが戻ってこなければ地域は消滅してしまう」「復興するためには子どもたちが必要だ」という話です。この報道が最初に出たのは2013年5月13日の新聞でした。その時には「本当にこんな馬鹿な考え方があるのだろうか？」と思っていました。でも、今年2月5日に、いよいよ福島県はこれに着手していくことがテレビで報道されました。それに先立ち、県内全中学1･2年生37,000人を対象に「あなたは中高一貫校ができたなら入学を希望しますか」というアンケートを取りました。そしてその結果は、合せて745人の子どもたちがここに入学したいと答えたのです。でも、原発からの距離として30km圏内です。魅力的な中高一貫校があれば、私は入学したいと答えた子どもたち。双葉郡出身はそのうち113人であったと発表されました。自由回答で新しい学校に求めることとしては「放射線の心配せずに通学できるようにして欲しい」「原発トラブルの時の対応を明確にして欲しい」との意見がありました。福島県はこの意向を受けて、学校に一定のニーズがあるとし、カリキュラムなどの検討に入り、3億円の予算が付けられました。2019年までには土地を造成し校舎やグランドを整備する検討を始めています。30km先には危機的な状況があるのに「子どもたちが戻らなければ復興はない」と、言い切る大人や行政…。余りにも辻褄が合いません。

私が勝手に付けた名前なのですが、「病気になってもだいじょうぶキャンペーン」と思われる情報を多く耳にするようになりました。郡山市保健所は子どもたちに「がんのおはなし」というチラシを渡しました。「将来、クラスの2人に1人がガンなる。そして、そのうち10人がガンで亡くなる」との情報をマスコットキャラクターが子どもに話をする。このような

チラシを出すことが何を意味しているのでしょう。私には理解できません。これはかなり不評で反響が大きかったので、文書は撤回されたようです。ですが、つい最近、今度は「キッズ・キャンサー・セミナー」が開催されることを知りました。新5･6年生24名が参加するセミナーです。内容は病棟見学やガンについて学ぶ、手術体験やエコー検査体験などをします。子どもが「ああ、自分は病気になっても、福島県では自分の面倒をみてくれるんだ。だからガンになってもだいじょうぶだ」と、考えさせたいのでしょうか。でも基本的に、子どもは病気になってはいけないのです。どの子の生命も健やかに成長し、その子が与えられた能力を充分に生かして、人生を楽しみ、自分の存在意義を感じていける社会を作る。それこそ大人がしなければならないこと、大人の責任。教育現場の使命。そして、子どもたちの健康をサポートするのが県立医科大であるはずなのに、「たとえ病気になってもだいじょうぶだよ」と意識に植え付けていく、この方向を私たちは非常に恐ろしく感じています。さらに、たとえ高線量であっても六魂祭(註1)が行なわれました。このように、人々は0.5μSv/hの中、六魂祭に向かいました。そして、これは郡山市内の小学6年生が卒業記念の植樹をしたところです。そこは0.82μSv/hあります。高線量であっても植樹が行われたのです。何かおかしい、でも私たちは毎日の出来事として次第に感覚が麻痺していきそうな気がしています。もう少し色々なお話をしたいのですけれども、やはり私は会津の人間ですから、会津のお話をさせていただきたいと思います。私は「会津は福島県民の縮図」だと思っています。会津地方の人々、県内自主避難者の人々、そして強制的に避難をさせられた人々、もちろん細かく分ければもっと分けていくことができるのですけれども、大きく分けるとその3つの背景を持った人々が一緒に住んでいるところです。県外の方たちから見れば、会津若松はいつも「比較的線量の低い地域」と言われます。「会津は大丈夫でしょう」と、随分、名のある方たちからも私は言われてきました。確かに、比較すればそうです。でもそこにもホットスポットが存在します。そして特に会津若松は観光による復興を目指しています。当初から「自分たちは被災者ではない」と言い、除染はまったく行ないません。そして昨年の大河ドラマ「八重の桜」(註2)が来てしまいました。八重の桜が終った後にまさか除染なんてできるわけがありません。除染を全く行わないので「福島県の大きな町で比較すれば、会津若松こそ、随分汚れているんじゃないの？」と言われるくらいです。しかし、そこに住む会津のお母さんたちは自主避難者や強制避難者たちの人々のその苦労を聞けば、自分はもう被災者だなんて口に出せないと思います。何故ならば、私たちは家族が一緒に住んでいる、お父さん、お母さんには仕事がある、一緒に住める家がある、まあまあ安全な食べ物があるとなれば、自分も被災者だなんて絶対に言えないのです。たとえ子どもを保養に出したいと思っても、先に保養に行かなければならないのは、中通り、浜通りの子どももたち、自分の子どもは後回し…と遠慮してしまいます。

皆さんのお耳に届いているかどうかは分りませんが、県内自主避難の家族は本当に人権が無視された日々を過しています。声を挙げ、待たされて、やっと家賃補助が県から出ました。しかしそれには様々な条件が付いています。例えば、家族4人には6万円の家賃補助が出ます。しかし、県内自主避難者が会津若松に来た時には、もう既に強制避難者のために借り上げ住宅が押えられていました。自分たちは住む場所を選べなかったのです。物件がなく、例えば6万3千円のアパートに住まなければならなかった。そうなると、家賃補助は0円です。つまり、6万円を出してもらえて、3000円は自費で払えばいいと思ったのですが、6万円より高い家賃は対象外となり、6万円も出してもらえないのです。それでは、11月5日の発表だったと思いますが、家賃6万円以下のアパートに引っ越すこともできなかったのです。なぜなら、11月1日現在の住居が対象と定められたからです。さらにその家屋が耐震構造であることも条件でした。しかし、県内自主避難者が選ぶことができたのは古い家屋でした。私たちは笑い話のように「あの地震に耐えたのだから、耐震構造になっているんじゃない」と言いますが、そんな古い家屋が耐震構であるわけはないのです。また、郡山市の自主避難者は、郡山市内の線量が高い自宅から転居して子どもが転校しなくても済むことを考えた人もいます。つまり、放射線量が低い地域でアパートに住んで子どもが転校しなくてもいいようにしようと。しかし、同一市内の引っ越しも家賃補助の対象ではなかったのです。会津若松市は自主避難者には非常に厳しい判断を取りました。恐らくいわき市のように異なった町民が住み、その中でコミュニティを作っていく難しさを見て、会津若松はそのように判断したのではないかと思います。家賃補助対象者の子どもしか公立の小学校中学校に入れませんでした。自主避難者のお母さんたちは、住民票を移したくない人がいます。しかし、会津若松市はまず公立小中学校に子どもを入れたいのであれば住民票を移す条件を出しました。住民票を移したくない理由はたくさんあります。やっとの思いでお爺ちゃんお婆ちゃんを説得して、会津若松に来たのに、さらにまるで家族が別れ別れに住むようになったような住民票にはできない。または自分たちが会津若松に来ている間にもしも住民票がなかったなら、子どもの甲状腺検査の通知が来ないかもしれない、除染の通知が来ないかもしれないとの不安から二重生活を選んだのです。そして、子どもたちは私立中学校や小学校に入り、入学金や制服、授業料を払わなければならないのです。

1回の説明では、なかなか理解できないと思いますが、このように県外に出た自主避難者とは全く異なる苦労が実は県内自主避難者にはあります。ぜひ、このことはマスメディアに取り上げていただきたい。会津には強制避難者がいます。その苦労を聞き、自分たちの不安と比較すれば、会津の住民はやはりますます自分は被災者だとは言えなくなってしまう。でも、私はこの原発告訴団が始まる時に、自分の気持ちを話すことで確かめる機会を4回持ちました。それぞれが3・11以降どのような思いで暮していたか。胸の奥底にある思いを明かしていくうちに、だんだん自分たちだって被災者じゃないか！自分たちだって当事者だったじゃないか！と確認しその思いを陳述書に書いていきました。私は今でも言い続けています。自分たちの思いを、経験を、悔しさを過小評価することはやめよう。被害の過小評価するのは日本政府や東電のやっていること。私たちはそれをしてはいけない。なぜならば、痛みを過小評価し、自分

たちが口を噤んでしまう時に、それは政府が狙っている道筋を進んでしまうことになるからです。政府の思う壺にならないために、私たちは自分たちの体験を、思いを、きっちりと語り継いでいく。それが、せめてものこの時代、この原発事故を起してしまった大人としての責任だと思っています。

使用済み核燃料棒の取り出しが続いています。しかしあのプールの中にあった瓦礫はどこに行ってしまったのでしょうか。「汚染水」「汚染水」と騒がれている時におそらく取り出しが続けられていた。では、あの高い線量を帯びた瓦礫はどこへ行ってしまったのか、私たちには分る術がありません。そしてこのように、爆発、またその原発事故の原因や結果の証拠がどんどん無くなっていくのです。あそこの現場検証がなされていない、その間に証拠がすべて無くなっていくんです。なぜ、私たちはそれを見ているだけなのでしょうか？この3年間の辻褄が合わない原因は謝罪をしない、原発を諦めない日本政府と東電にあると、私は思います。では誰がこの責任を取らせるのか、やはり一つの望みとしては検察審査会です。私は検察審査会って何なんだろうと、調べてみました。検察審査員に選ばれた人たちは「司法に一般国民の常識を反映させるという目的で検察審査会の職務に携る、良心に従い、公平誠実にこの職務を行うべくことを誓う」とありました。本当に東京で選ばれた検察審査員の一人ひとりに常識を持っていただきたい、そして何よりも辻褄が合うこの本（『これでも罪を問えないのですか！』）をしっかりと読んで判断をしていただきたいと思います。

これは会津のピカピカの一年生が入学式の時の写真です。「高い線量ではない」と言われてしまう線量ではありますが、これを私たちの日常にしては絶対にいけないのです！このような大切な時間をいただきまして、本当にありがとうございます。会津は原発から100km離れております。そして、そこでも私たち一人ひとりの苦しみが続いています。ぜひ、メディアには取り上げていただきたい。そしてこれは最早、福島県だけの話ではない、福島県外だからこそ、苦しみを味わっている人たちはたくさんいるのです。ぜひ、そのことも取り上げていただきたいと思います。ありがとうございました。

(注1)東北六魂祭：震災後、復興を訴え開催されることになった、東北六県の祭礼を一堂に集める観光行事。年一回、各県庁所在地の回り持ち開催だが、2013年には福島市が会場であった。

(注2)八重の桜：2013年にNHKで放送された連続ドラマ。新島襄の妻・八重が主人公。会津が主な舞台であった。

>>>

福島からの発言　3

橘柳子さん（浪江町から本宮の仮設住宅に避難）

今日、この参加のお誘いを受けまして、「うーん、どうしようかな」って逡巡をしました。でも3・11以後、友人知人から「大丈夫？」「どうしてる？」って言われた時に、「大丈夫だよ、怒りを友として生きてるから」って答えることにしてます。そして今日も怒りとともに遥々、雪の中を掻き分けてここまでやって来ました。これに参加するに当たって、何を話せば良いのかしらと、武藤類子さんにアドバイスを求めました。そのアドバイスの中からピックアップして、書いてきたものを読ませてください。全部、頭に入らない、何を喋り出すか分らない、悲しいかな、歳を重ねることはいいことだってさっき落合恵子さんがおっしゃいましたが、悲しいこともありますよね。書いたものを読ませていただきたいと思います。

まず最初は、浪江の仮設住民。浪江町には原発はないんです。双葉郡というのは6町2村ありまして、2村には原発はありませんが、6町のうちの浪江町にも原発はないです。従って、事故の日は国からも東電からも事故の連絡はないままに避難開始。住民は2、3日したら戻れるだろうっていうことで、身近な荷物を持って出発しましたが、そのまま現在に至っています。じゃあ、どのくらい続くのかっていう展望がないんです。ぜんぜん見えないです、仮設にいるとね。何の情報もないです。従って刹那的な生き方にならざるをえない。まあ、男性はこれ（飲む仕草）ですよね。昼の宴会。お酒を始めます。それからパチンコ、競馬、福島競馬。福島まで行くんです。（避難先の）地域住民は「避難をして補償をしてもらってるのに、日中から酒飲んでパチンコしてるとは何だ！」って蔭で言いますよね。それは当然と言えば当然かもしれませんけれど、酒を飲まないではいられない、何かに気を紛らせなければ日々、生きていけないという思いもどこかにあるのかなって私は思っています。こういう生き方は男性に多いですね。

話すと長くなるからちょっとだけ言いますが、とにかく、帰還と健康被害の考え方が住民100人いれば100人違うと思います。そこがたいへん難しいです。「絶対帰るぞ！」「元に戻せ！」「先祖代々なんだから帰らなきゃいけない！」というその考えと、「放射能は気にしたらストレスになるから、気にしなくていいんだ！」という声があるんです。私は元教師なもんですから「先生は考え過ぎだよ！」って言われるんですね。でも考え過ぎて過ぎることはないものが放射能だというふうに思っておりますが、考えが全部違いますので、そこをまとめきってどういう闘いを組んでいくかというのはたいへん難しいというふうに考えています。後は除染と区域再編の節がたいへん強いです。「除染したら、まあ帰れるだろうからいいべ」っていう考えと、「いやいや」っていうのと、それよりも何よりも、再編されたら賠償が無くなるんだろうという心配をされる方と、色々です。そこもまた難しいです。これは分断の隠れた要因だというふうに私は思っているんです。だからそれに乗らないようにしなくちゃいけないんだと思っております。

私のところは去年の4月から解除準備区域なるものになったんですが、現在、庭は4.4（μSv/h）あります。芝生の上は。でも帰すって言うんです。で、環境省が3月から説明に来ます、除染をします、って言うので、「来なくていいよ！」って私は言ったんです。「あんたたち来ても同じ話でしょうから、聞かなくっていいです」って言ったんですが、来なきゃいけないんだって。ところが、2人みえた方は何と現地雇用で、福島県の人なんです。そうなると言えませんね、はっきりは。でも、とにかく私は来なくていいって言ったんだけれども福島県の人だっていうことが分ったから、「まあ、お仕事でしょうから、聞きましょう」と。で、聞いて、「じゃあ、ＹＥＳ・ＮＯはあ

るの？」「ありません…」。私自身は除染しない希望なんです。しても無駄だっていう考えがどっかにあってね、当座、ちょっと下るとは思うんですけれど、ずっとキープできるわけがないっていうふうに考えますので、しないで欲しいほうなんです。そんなもの、お金かけるのなら、土建屋さんに奉仕するのなら、賠償のほうを多くして欲しいんじゃないかって、皆だいたいそんな考えです。「いや、絶対、除染だ！」っていう方ももちろんありますけれども、そんな中で揺れています。

それと、まあ、よその議会のことは言えませんし、市会議員さんもいらっしゃるのでちょっと余所の方を見ながら言うんですが、考えの相違点というか、問題点が……議員さんがね、帰りたいっていう思いが強いと、皆が帰りたいというように言うんですよね。そしてもう、町民の意見を聴いたが如く言うんですよ。聴いてません、はっきり言って。うちの仮設には議員さんが来てそのような話をした覚えがありません。私は議会公報を見て、「ふううう」って。議員の教え子がいますので、「どういう状況？」って聞いているから、誰がどういう発言をしているか、だいたい分るんですけど、「じゃあ、自分が帰りたいんじゃないの？」って言うと皆、黙っちゃうんです。けれど本当は議員さんは町の人々の意見を捉えて、どういうふうな町を作るかっていうことを提案するべきなのに、残念ながら、よその町は知りませんが、浪江町では、まだですね、聴きに来てはいないっていうふうに。ま、新しく議員になった方には頑張っている方も少しいるんですが、何か疑問ですね。そうい状況があります。なお、議員さんは放射能の勉強をしてないから。全然、ゼロですから、悪いけれど。佐藤和良さんは特例の人ですからね。ずっと昔から闘いをしている方だから、放射能については詳しいですが、ほとんどの議員、例えば浪江町では 16 名いますけれど、まず、放射能の勉強はしてない。で、この間、珍しく若い議員がちょっと災害復興住宅の説明に来たんですけれど、その時に「あなたたち議員さんは放射能の勉強したの、3 年経つけれど？」って聞いたら、「やってません」って言うから、「やってないで町民をどうやって守る気？」って。ちゃんとそれなりの本を読んで、勉強をして、それから町民の立場に立って、取り組んで欲しいっていう要求はしましたけれども、まあ、どういうふうになるか、あんまり期待はしていません。残念ながら。あと、仮設に居るのはほとんど高齢者なんですよ。最初、子どものところに避難したんですが、同居できないんですよね、都会は。狭くって、とても一緒にはいられない。従って、戻ってきてます。このあとね、何年か先も見えない中で自分が死んだら、骨になっても帰らないのか、っていう意見があります。お墓に納骨できないわけですから。入れないお墓もありますのでね。そういった老後の不安、「ここで終末は迎えたくない」というふうな考えがほとんどの高齢者にあります。まさに悲劇そのものですね。

じゃあ、あなたの気持はどうか、それを言いなさいって武藤類子さんに言われたのですが、私の現在の気持は、あまりにもありすぎて、まあ、どこから始めたらいいか分からないんですが、敗戦の痛手とこの原発の避難の苦しみっていうのが、私は 2 回、体験があるわけです。だから私はこの『これでも罪を問えないのですか！』という本に、国から 2 度、棄民にされたというふうに書いてあります。まったく棄民です、この状況は。棄てられた民です。感じてない方もいらっしゃるかもしれませんけれど、私個人はそのように捉えています。で、「健康で文化的な生活」の保障と言っていて、戦後、営々と闘いをしてそれを守ってきたにもかかわらず、「それは現時点では疑問だ、保障されてないよな」って思っております。癒しを求めても心が晴れないんです。こう、寸時で終るんです。その時、ちょっとだけ、こう、笑って、「ふふ」って思うんですけれど、心の底からは楽しめてないんですね。ということは、やはり生活環境と言うか、置かれている状況と言うか、先が見えないということだと思います。先が見えれば希望を持っていきますが、希望というのは難しいですね。もちろん、大事にして追い求めていきたいというふうに思ってます。

先程も申しましたように、私の町では、放射能の中、114 号線(註)を避難しました。SPEEDI の情報もないままに、放射能の溢れる道を避難しましたので、被曝をしています。従って町長は双葉郡では一番先に、「健康手帳」というものを発行いたしまして、内部被曝のデータを少なくとも年 1 回は受けて、そしてそれを記入するものを配布しました。全戸に。全員に。でも、それは国がやらないからです。本来は国がやるべきものだというふうに私個人は考えております。国は絶対作らないだろうという意見もありますけれども、作らせなければいけないのかなっていうふうに思っております。しかし、因果関係は認めないでしょう。今、(癌の疑いの) 子どもたちが 70 何人いてもそれは「因果関係はない」と言っていますね。新聞の中で、放射能とこの 75 人の数字は因果関係がないと言っています。因果関係がなくて、3 年間に 75 人も出るわけがないんです。「お医者さんも嘘つくんだ」と私は、個人的には、単純な表現ですが、思いました。人間の体っていうのはすごい微細で繊細だと思うんですね。ですから、何十年後かには出るんではないだろうかと思ってるんですけれど。今は出ないと思います。でもゼロ歳児が 2〜30 年たてば 30 歳になるわけです。その頃、出るんじゃないか。そういうデータもあるわけですよね、チェルノブイリで。それを皆さん見てらっしゃるからですが、3〜4 年より、その後のほうがカーブで出てるので、それをどういうふうに福医大の山下なる人物は捉えていくのかなって思います。

何よりも自然環境の破壊をした、ということへの怒りが収まらない。すべての安心の喪失。本当に残念です。放射能の中で生きる苦しみというのは、実際に生きている人じゃないと、分からないんじゃないかなって思うんですね。今年 3 年目で通常は 0.23 (μSv/h) なんですが、今回の雪で、0.04 です。全部、雪がね、押えつけてくれたんだと私は思うのですけれど、こんなの見たことないです。でも、昨日から少しずつね、上がってきました。「やっぱりな」っていう思いです。あと、凍り付くと下がるんですよね。表土が凍ると、押さえられて。そういう時だけ喜んでるんじゃなくて、だいたいこう見ながら生きるっていう生活を常にしております。とにかく苦しみの中を生きるということを理解していただくには、どのように語ればいいのだろうかって常日頃思うのですが、たいへん難しいことだと思ってます。

それから、東電と国に対する思いを話してみれば、ということでアドバイス頂きましたけれど、日本の大企業としての社会的責任の欠如には呆れてものが言えない、ものが言えないから黙っているわけにはいかない。あの対応、避難している人への

向き合い方、何か言っても、本当に鍛えられてますよ。アメリカの軍隊が色々こう暴言を吐く練習をして、それにも動じない訓練してますよね。それと同じです。何言っても、「済みません！」「済みません！」の繰返し、暖簾に腕押しです。よく鍛えられてるなって思います。そしてその一方でトップの不遜な態度にはものも言えないですね。そして問答集まで作って、国会でね、それをやらせるというので、賛成議員さんたちへの支援をまた開始している、また「ムラ」の復活ではないだろうか。日本の国はどういうことなんだろうなって。まあ、私がいつも思うのは、戦後の責任というか、イタリアとドイツは即、「脱原発」って言ったのに、日本だけはどうして脱原発じゃなくてね、「即」とは言いませんけれど、「再稼動宣言」と言い、「輸出」と言う、ということは常に戦争責任の追及がどこかで欠落してたのかな、っていうふうにつくづく思いながら生きております。国がやった、国策として進めたこのエネルギー政策に対しての反省が全然、見られない感じです。それを許してきたのだなっていうふうに、自分も含めてですけれども思う時があり、如何ともし難い無念さを抱いております。犠牲を強いられている避難者への慮りなんていうのは全然、感じませんよね。国会答弁も、議員さんたちも。ただただ「ちょっと行ってきました」みたいな。不勉強。首相を始め、環境大臣の石原ももちろんですが、復興大臣は福島の人ですから、あまりね……「何であんたが復興大臣になったか考えろ」っていう葉書をね、書いて送ってるんです。暖簾に腕押しですけれど。国会議員は言えないんでしょうね。パーティの券は買ってもらっている、そして詭弁を弄することに長けているという情けない人々です。だから何よりもこのオリンピックをそんなに誘致したかったんだろうかと。放射能はフェンスでガードされている、なんて嘘までついてオリンピックを招ぶっていうことはやっぱり原発事故を隠したかった、隠したいが故だろうというふうに私は思っております。それもどこかで国民が許してるのかな、っていうふうに心の隅で思ってます。

とにかく東電も国も双方で言い続けた「事故は起きない」ですからね。もうずーっと双葉郡の住民たちは事故は起きないって言い続けたのを聞いているわけですから。でも、事故が起きても先程、先生のお話しもあったし、他の方々からも出ましたが、反省は感じられません。謝罪もしない。そんな状況を背負いながら、生きてます。

最後になりますが、「周りの人たちの様子は？」というと、支援事業がありまして、日赤とかその他のところで「何々教室」というのを作っています。私の仮設ではミシン・クラブで女性たちが集まって、寄付されたミシンで作品を作って、そしてそれを寄付するようです。というのは、売っちゃいけないそうですね。援助された組織には、利益、利潤追求みたいなことはやっちゃいけないということで売れないんだそうです。後は、米の袋の口のところに紐ありますね、あの紙で籠編みをしています。それも編んでお友だちにあげるけれど、私は「いいから売りなよ。私買うから」って買って、友だちにやってるんです。すごく上手で素敵なんですよね。そういった物も励みになるんじゃないかと。本当に一時の楽しさを求めながら、生きてるんですよね。他の人たちは土を友にしてきた人たちが多いんです。私たちの仮設では。3 年目の今は生活に張りがなくなってますよね。精彩が欠けてきているんです。何か老人たちの、男性も女性もですが、元気がなくなってきているのが分りますね。外出はいたしません。たまたま仮設で一緒になっているから、顔を合わせても、挨拶もしない方もいるんですね。それはそれで、生き方だから、別に責める気もないんですけど、ちょっと寂しいなっていうふうに思います。

それから同じエリアに住んでいても、まあ 62 世帯で 100 名くらいの人がいます。余談になりますが、浪江町は 2 万人で、福島県内に 31 仮設あります。その他は、和歌山県以外は全部の県に避難をしています。外国に 8 人避難をしているんですけれども、もうバラバラですよね。町の再生は有り得るんでしょうか、というふうな思いでおります。お友だちは一時の楽しみでその時だけ集まるから、深くは交わらない。その時だけで、やっぱり昔交流があった友だちを優先している関係ですね、見ている限りは。新たな交流は、表面的には私にはないし、見られないです。お茶も飲みにもあまり行かないです。ただ仮設内で、私が支援してもらっている COOP さん、アイコープさんというのがあるんですが、そのコープさんは月 1 回、野菜とかを支援してくれる。それは高齢者は喜ぶんです。今回のような雪の時なんかは買いに行けませんから。それは毎月 1 回、頂いているんですが、そこも、申し訳なくてね。そしたら、「いいんだよ。東電に請求するんだから、遠慮することないから」って言って、月 1 回はその理事長さんの配慮で届けてもらってますので、たいへん喜ばれております。

その他。人々の心を国や東電に伝えるいい方法はないものだろうかと常日頃、思います。こういう集会ももちろん大事。金曜日の集会も大事です。しかしデモを「音」と言ったり、「テロ」と言ったりする人がいるわけです。それを野放し的とは言わないけれども、そのままになっているという情けなさがどうにかならないものかなと思います。民衆というか、人々の意見をやっぱり伝えるべきではないかと思っているんです。法的拘束力はないかもしれませんけれども、やはり各町村からの意見書、下からの意見書を国のほうにね、上げていくべきだと私個人は捉えてます。先程のデータにありましたけれど、脱原発の意見書を上げた（自治体）のは残念ながら福島県は 11 しかない、59 市町村があるんじゃないかと思うのに、11 だけです。

それから特定秘密保護法も、私はもう戦争を体験しておりますので、すごい恐怖感があるんですよね。矢追田さんという方の話をかつて聞いた時に、「昔は、『あいつは共産党かも知れない』って、『知れない』で捕まったんです、私は」って話を聞いてますので、尚ね。戦争の後、大陸から引き揚げてきて色んなこと見たり聞いたり、小っちゃな時なりにしておりますので、秘密保護法に黙っていられないということで、私の町に電話をして、もう期間が迫っていたので全員協議会で議論をして意見を上げてくださいって。上ったんです。でも福島県では 2 町だけ。浪江町ともう一つは会津の町だけです。やっぱり、拘束力がなくても民意を反映するっていうのはそこじゃないかなっていうふうに個人的にはですよ、思ってるんですが、後で何かご意見があれば教えていただきたいなっていう願いをこめて終りにしたいと思います。本当に今日は有難うございました。

(注)114 号線：浪江町から西に、川俣を通って福島市に抜ける国道。富岡街道。